

〔書評と紹介〕

青森県六戸町編・大石直正監修

## 『北辺の中世史―戸のまちの起源を探る』―

工藤 弘樹

中世、本州の北辺の地に、糠部という郡があった。馬産地として、当時の都にも聞こえていたこの郡は、西国の一国に匹敵する面積を有し、郡内は、戸・門という特殊な単位で構成されていた。

本書は、その糠部郡を構成した戸という行政単位を、現在の町名にもつ六戸町で、3回にわたっておこなわれたシンポジウムおよび講演会の記録を中心に構成されている。以下に、その内容を示す。

### 第I部 シンポジウム「戸と門の起源を探る」

問題提起 戸の初見から

盛田 稔

鎮守府將軍清原真衡と「戸」「門」の建置

入間田 宣夫

戸のまちの起源と交通

大石 直正

戸と門の起源を探る

森 ノブ

四戸という村名について

小井田 幸哉

### 第II部 戸のまちの歴史をめぐって

戸のまちの古代・中世考古学

栗村 知弘

室町の南部氏

伊藤 喜良

九戸合戦―中世糠部郡の終末―

小林 清治

### 第III部 戸のまちの案内

中世の北方に展開する歴史で、安藤(安東)氏と日本海側を中心とした北方世界の实像についての近年の研究の進展に対し、同じく北方世界の中にありながら、糠部そして、その領主である南部氏についての研究の遅れは、否めない事実である。本書は、そのような北方史研究の空白地域である糠部について、「戸のまち」を、一つのキーワードにして、多角的に、その実像に迫ろうとしている。また、各論文の他、第III部では、戸のまちの案内を入れて、旅行ガイドブック的な心配りもなされている。

本書に示されている各論考を、一つひとつを取り上げ、それらに論評を加えることは、著者の能力の限界を超えてしまう作業である。よって、本稿では、本書の中で明確にされた問題点について、近年の研究動向をもとに整理し、拙い寸評を加える事で、書評の任にかえたいと思う。

第一には、戸と門の起源、ひいては、糠部の建郡に関する問題点である。

大石直正氏は、「戸のまちの起源と交通」の中で、奥州藤原氏の時代に北奥の地で、いっせいに建郡がなされたという従来からの説を、考古学の成果に学びつつ、交通路の変化を手掛かりに論証し、北奥建郡は、奥州藤原氏の政治力によっておこなわれたと結論づけた。

これに対し、入間田宣夫氏は、「鎮守府將軍清原真衡と「戸」「門」の建置」で、延久二年北奥合戦の直後に、清原真衡のリーダーシップのも

と、一斉に、北奥建郡がなったのではないかという説を新たに打ち立てた。

また、遠藤巖氏は、後三条天皇の北方政策やそれを引き継いだ白河治世を念頭に、北奥建郡を当時の国家事業の一環と見なし、十二世紀初頭の、藤原基頼が陸奥守兼鎮守府將軍として着任し、「8年間も当地に在職した時期」に、一斉に施行されたとする。<sup>2)</sup>この遠藤説は、一九九七年、男鹿でおこなわれた「男鹿シンポジウム」で、斉藤利男氏によって、更に具体化された。<sup>3)</sup>斉藤氏は、遠藤説に立脚しながら、更に、当時の政治情勢を分析することによって、天仁元年の、陸奥守藤原基頼が重任の宣旨を受けた時までに、北奥建郡がなされたという結論を導き出し、それが、新しい蝦夷沙汰体制のあらわれであると示した。

この、北奥建郡は、北奥における中世的郡郷制のスタート、言い換えれば、蝦夷沙汰の新たな展開の始まりととらえることができる。そのような大きなできごとが、地域権力が中心になっておこなわれたとは考えがたい。むしろ、国家的事業の一部であり、国家が中心になって、強力に推し進めたと考えるのが自然であると思える。そのように考えたとき、大石氏の、奥州藤原氏が中心になって建郡がなされたという説にはうなづけないものがある。また、当時の国家政策を考えたとき、入間田氏の主張する延久合戦直後、そして、古代律令国家によってなされた建郡の延長のような、北奥建郡という考え方も、一考を要すると思える。

この北奥建郡については、四者が、異口同音に「一斉になされた」としている。問題は、「一斉に」実行できる主体が何であり、どういう状況の下で可能かということであろう。

この議論は、従来、漠然と奥州藤原氏の時代のできごとと考えられていた、北奥建郡という事実について、新たな展開を見せたものである。今後、さらなる史料分析・史実の確認が必要となると思えるが、議論のスタート台を築いたという点で、本書の意義は大きい。

なお、本書において、大石氏、入間田氏、そして遠藤氏の三者の説について、考古学的立場から、栗村知弘氏が「戸のまちの古代・中世考古学」において言及されている。合わせて参考にされたい。

第二の問題点は、糠部の領主南部氏の権力構造についてである。

伊藤喜良氏は、「室町の南部氏」の中で、室町期の大名権力としての南部氏が、中央権力との関わりで、「奥州探題体制」の中に位置づけられていたことを明確にし、単なる、地方の権力者としてではなく、室町期の幕府権力などをふまえたうえで、南部氏の活動に言及している。また、「余目氏旧記」の分析をもとに、同様に北奥に存在する、安藤氏とは、異なる秩序内に位置づけられていると主張し、安藤氏と南部氏の権力構造の違いを指摘するなど、中央権力や東北アジアの歴史を念頭に、広い視野に立って、南部氏を論じている。

また、小林清治氏は、「九戸合戦―中世糠部郡の終末―」の中で、北奥羽の大名の特長として、「同族並立が容易に克服されなかった」ことをあげ、南部氏も、同様であったと述べている。小林氏は、南部氏が、晴政の段階に、將軍足利義晴からの偏諱を受けたことで、三戸南部の宗主権の地位自体は決定していたが、後の、信直の南部宗家の地位は、あくまでも、根城南部(八戸)氏や一族の北信愛の支持があつて成立したも

のであって、一族支配が確立した結果ではなかったとし、このことが、結果として、九戸合戦を引き起こすことになったとする。

小林論文の中で、最も注目すべきは、九戸合戦の意義についてである。氏は、九戸合戦の秀吉方の軍事動員のあり方から、九戸合戦によって、秀吉による「日の本」にまで及ぶ全国支配が確定したとする。このことは、天正十八年の奥羽仕置後に起こった、九戸一揆を考察するうえで、重要なことであり、秀吉の「天下統一」への評価とも密接に関わってくることである。

伊藤氏、小林氏ともに、全国的な視野に立つて南部氏を論じている。そういう意味では、本書によって、南部氏が、日本中世史の中でどのように位置づけられるかの方向性が見えてきたと言えるだろう。

最後に、今回の両氏の論考によって見えてきた問題点を指摘したい。まず、「奥州探題体制」と「蝦夷沙汰」権の関わりについてである。

安藤氏と南部氏の相剋は、建武政権期以降の対立が、そのまま応永期の激突の原因になったのかどうか。

次に、戦国期の南部氏の権力のあり方についてである。小林論文では、宗家をめぐる、晴政と信直の争いと、信直と政実の争いを同じ次元で論じられているが、果たして、それでよいのだろうか。

これらの問題点は、中世を通して、南部氏の領主権力がどのように展開したのかということを明確にすることで克服されると思われる。

南部氏が、どのようにして北奥に所領を得たのか、そして、その権力がどのように展開したのか、特に、北奥に存在した勢力であるために抱え込んだ問題点に留意しながら、検討していくことが重要になるであらう。

う。

以上、本書によって明確にされた問題点について、簡単な整理と拙い寸評を加えてみたが、最初に述べたとおり、糠部そして南部氏については、まだ、不明な点が多く存在する。特に、森ノブ氏、小井田幸哉氏の論考の中にある、戸の名前の起源や戸の地名の変遷についての議論は、更に進める必要がある。加えて、南部師行が、北奥の地で活躍できた前提とも言える鎌倉期の南部氏の糠部での権力のあり方など考えるべき点が多い。

本書は、このような糠部・南部氏の研究を今後進める上での一つの礎を築いたと言えるだろう。

#### 註

(1) 国立歴史民俗博物館編『中世都市十三湊と安藤氏』新人物往来社(一九九四)、小口雅史編『津軽安藤氏と北方世界』河出書房新社(一九九五)など。

(2) 遠藤巖「米代川流域の中世社会」、『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第九号(一九九四)。

(3) 斉藤利男「小鹿島・エゾ・東北アジア」、『男鹿シンポジウム発表資料』(一九九七)。

(名著出版 A5判 二四五頁 本体三四〇〇円 一九九七年三月刊)  
(くどう・ひろき 青森県史編さん室)